

序



東廠山のうゝ根存といふところなる
市中を這入るのうかうのうのうのうの
みくら源く候を素よ海ひ路崎よ候を
いつこの比よやそのの 所新より都を此
營を阿ますぬを世流ひてより今もたな紙
書とくくわいゝとらうまことと母身より
香物く支ぬゝ一平なよ都の何志

茅舎をひすひて充る菓と名つくも
茅舎戸をうらみ明神の古き社のあり
いとよ久まうして秋をまはれ喜かひとほしく
神家の阿ふれを思ひ金龍山乃禱の声も
新れ枕をそとたそ観音寺の寐えを感に
まら急光輝林の夜とうこ一或は清山
日くく一れ橋よ杖をひよふ又は田の波
眼を掃く一め堂はれは心とあてきよみ

とあふまも一も世いほりよ暑をさひて
ふりく一れ飯外一充をや一かふひり
何一後白柴のまをさて雑談のほお
眼を掃く一て書画乃たりとさかき本日を
目付中一折くかう一美人のまをさる
魚一そ魚好法師の宗在乃姿をいとお
いとさひ一草を深くし是も穢せよと
る蹄つさけけら終る徒然のつとく

夏より秋と秋より冬とをいふあり例の
 吐存務ひまきして二三の句を次々ありし
 一夏百見れありひをよせて百句も他の百句
 月と冬人も撰仏の因をくめと或るは在花園の
 采を犯しある自ら十牛舎の涼風をうりて
 やどし百韻を調へりさしりく人よんす
 そのなすはしりしとあはしりし社中り月
 帖よりの四季の候れ又巻をのけりくこの
 百句をくしてしむしむしりまはしり
 終りしとまきしりすのせぬそのあしり
 ちりしりしりしりしりしりしりしりしり
 ちりしりしりしりしりしりしりしりしり

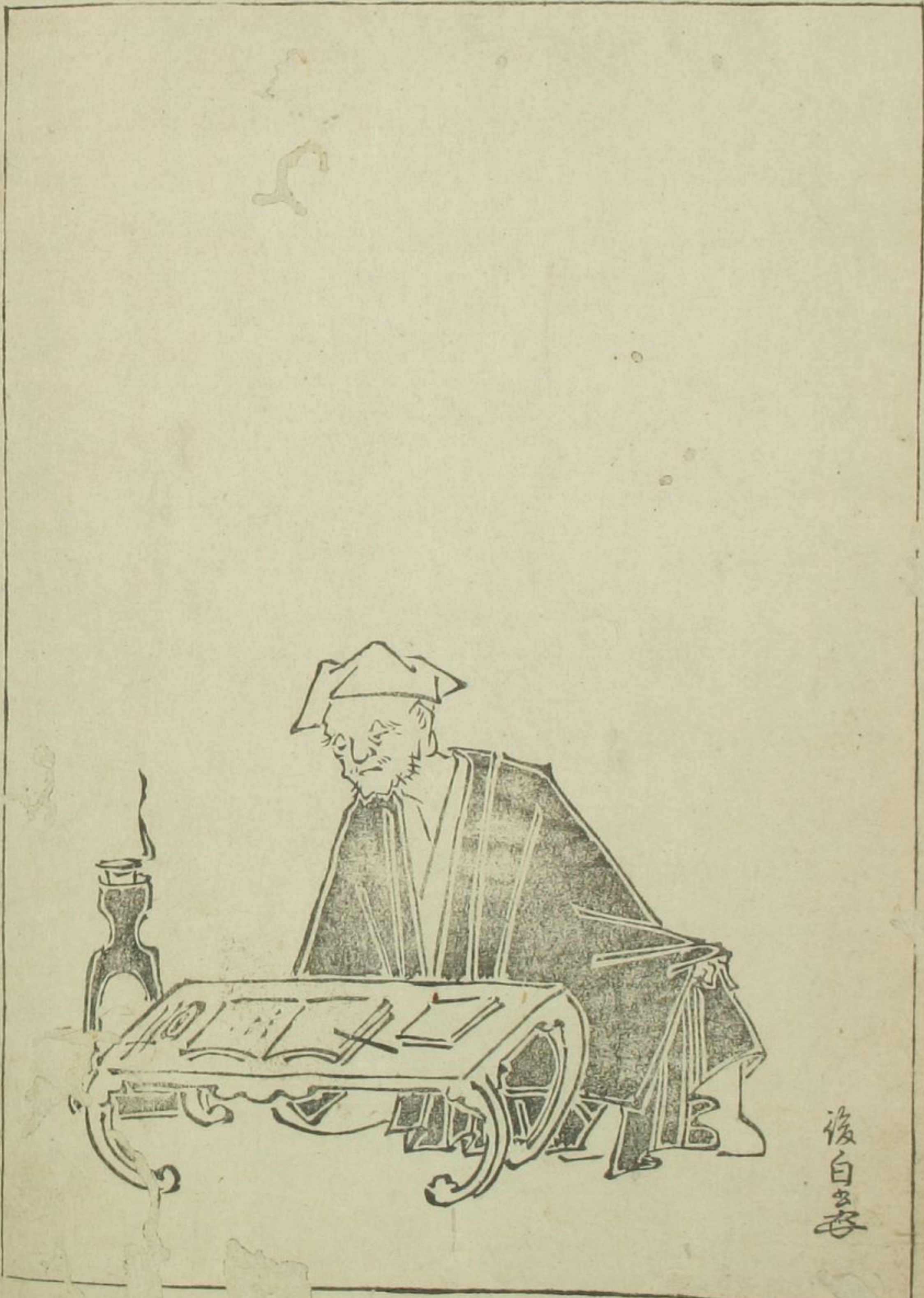
明和七庚寅六月
 雪中菴
 蓼太



折婦のうつろくはあつた
 ちれとのなま秋こそはまとい
 いふと結とそれもさうりか
 んとさうさうとのまのま
 阿めき

洛陽北船泊るさうり春うす
 瘦るやと屋を柳のみやうか
 うつろくさう名正北中子
 菱神く南のくま棧う那

葵太
 百頁
 四國
 文母



後白書

まこれ日にまう解てまうぬ糖種ふ分
ま菜の花よまふまうまうまうまう
ま柳やまありまありまありまあり
対智
涼風
五折

秋豆のまうまありまありまあり
秋風

帆の風れおれまありまありまあり
未然

音解やちきれくまありまありまあり
唯我

るの眼も解もまありまありまあり
荒涼

いふまありまありまありまあり
寛史

流音の解まありまありまあり
無求

まありまありまありまあり
牡丹

まありまありまありまあり
為妙

流音の果やまありまありまあり
得壽

あハまありまありまありまあり
眠我

まありまありまありまあり
吐月

鳥の声をまありまありまありまあり
船日影まありまありまありまあり

春始くまありまありまあり

雪や南殿より言記如海に
うらひすや竹より出る藤梅花
雪や月よりささめて存日星
うら花衣や神の鏡よ好つる心
恙草やまゝくまゝに夜ハ障の中も
美らさやありぬ妻と泣く心乃
松子見る顔も余なり春の花
橋よりゆく草も果かき夕雲蒼
園より小眠心顔なり

野菊
芳堂
眉山
都原
眠我
毒蝶
笛吹
十布
蓼古

雑子の声

夕虹や雑子よあくる日の下

文来

踏つけく雑子啼なり丸木橋
下前や花さく夜とあきらなり
濡美の指をさすりいゝ如海里
傘はしと下あくる人や風中
戸一本あくる日をれく空とつ楚
風はさけ泣るものなき風中
振あんと声も廣裡に雲蒼うれ

連珠
返春
鬼秀
八十男
蓼丸
一茶
蓬戸

元舟さく星をよけくさく乃るり
之はくを松の裾濃やすき積草
うらくくと海へおそひ蜘蛛か
蝶く小牛の追つくき道うか
去く雲の死より出るまき草
蝶くや笈よりと白くさうつ山
落つぬ風をくちりりまうつ

仙茶
和文
鬼守
枕司
麦車
夜梧
嵐色
斑象

蝶くや子のひく貸て眠せん
蝶くらなく水くさく柳く拂
藪へやうくえか顔もまき明に
夕唐此の里より二日冬うぬ
花もやしくちきくはくはく水け
しもぬ風くちつて来てんあはきく
ちりるぬ

藁舌
菊草
莎河
山秀

このる目を蝶か好風うちる極
朝くくくやこくま出侍さくく

染心
眠江

八町此人言り入法ぬれ
入おを為母言りあさくら
巴蓼

浩東山

いと海をき女のうき橋を那
鐘よりもるあういし初さく
得んえそ東と志りぬ山さくら
浮雲の人を根り持さく
死さうり是よ世捨る人色非
乳筆

木のりとの反吐も橋ようり
下りてあむきのふの花の藤うね
咲やこの花はうやと乃庭うき
於さよの拾ふやうなりまさく
女うり風こそ起はあはれ
錦まらごとく世ありぬ橋の記
千竿よおあはれ目をうり梨は茶
あうつきや遠よ志むる梨の巻
天府
鳳高
吐虹
魚尺
蓼太
投茶
斎茶
吏仙

海棠やえぬらうらうらの翠峯の内

怯車

海棠やおもえさうきそをまきさうり

虚舟

曲水れはうふ子船をくらやせりり

太喬

去ぬやぬれてハ橋のまうハやそ

桃司

まの地うら笑初うらうら顔のぬ

麻介

芳うらふとのつむ高やまきふる

兔夕

去ぬや男ひてまれうらうら

桃鏡

去ぬけ干あう海乃や桃の花

長好

二味線う糟うら起勢の笑離

蘭位

雷れ袖きとまきさあうより

富令

橋ふらまきとらむ日うれ新

人左

去葉み減りまうらうら川よまやあは

乃そをやまきとら風橋を名うけそ

杉橋れぬひうらうら一のりも

おりのうらうら

去う梅のうらまきとら白ふ月夜ふ

葵池

香ようする哉もふら梅死

茶静

垣るらぬうらうら香とら梅の香

巴水

山ありのやうく梅の小ほひうれ
梅は花想ひめりは咲けり
枕院小日くまそむるは白く
梅り多や戀けり勤くとの形
ひめり香や茶を記門はまを
白染や言解のありきより所
それゆゑの戀をさるるは
菜は花ややうくはしり豆腐
漕ぎけりるれを流るるは

南樓
必觀
百頁
古道
昔道
仙茶
仙賀
烏曉
箕

ほそものよゆりし梅の男の
蝶は川にえつけり梅は花より
山吹のきよけり花はおつり
さくさく思ひ捨るるは
や浦のさや此ありたり系上
花咲や枝をさるるは
遠くは花をさるるは
うけりしはちりや花の死
春風や花をさるるは

盤古
其童
夢太
毒蝶
死外
嵐色

陽を三十三雨めりり
 うけりや足踏あつる
 任僧は加藍福ひや九輪草
 ちこのあま目やん
 はむし海や茶摘は
 新妻よま
 ひ春や見送る障子
 ゆく妻や洗濯川も
 身得
 一声
 曲枝
 吐江
 梔司
 子交
 鯉牛
 山史
 八

灌佛の比奈はあら
 志けりゆく
 意しこそまされと
 人
 人の
 人の

灌仏やう
 綿入の穂
 夏菊も
 ちちく
 因雨も
 唯我
 蕨波
 梔司
 子交
 涼風

後よりける男ありてを夜之
老婦れ白髪物よりあも久
仏法の元日るる死水堂
各物とふちとあまぬし初盤
初盤しし水向もよしとつ盤
一寸れ端をりりりはつる川河
志し盤子彩のしし入牡丹丸
竹竿やに孝行れ善とこの
投へるるんあをり牡丹

投茶
走仙
普成
牡丹
無求
眠江
山秀
一声
牡丹

そちりり物のちいさ牡丹丸
河骨やセツさがりれ使者男
婦と逢ふ回れ畔及やくさるる
祭うし信うよ来さうか牡丹丸
それ花のまをれ福をむほん家
雲の字さうしつる牡丹丸那
竹竿や益ぬすひとの暮赤とも
そのいへるる彩岩や古口花
系よちれを志る人かを極か

竹竿
活丈
吐江
普成
鬼秀
太喬
信車
葵丸
金危

金車とて落れ日教や白牡丹
碎るくくふ八摺やうき月
陶家
女菊路

横くふく高れ長柄やほくき
秋風

かうりせ人にも能寐ん不き
蘭室

郭云侍やみろくのうき
四國

阿いさおれ死とあそきけ子親
芳堂

卯月世や急りし見とる海
如風

花ふりハ啼ぬ鳥なりし
遠見

二日月子七背りけ多り子親
荷燈

卯如死の言見の亭や喜す
枕司

そふともは落るも繩のちう
麦車

吾明れ新ある榭乃うち日
古道

門院の山後屋しや夏花摘
吐虫

み月阿やめあく比子苗と侍
雛れ

かしくそくもぬうハ
眉山

椿くく楯くく白ふ幟う拂
眉山

山くくやのほくもい且は
菅道

玉苗や十日く乃面如色
いもられれあちこちたぐみ鶴式
帷ふやる上りを記船下系
豆を豆とて衣形り飛を海
世よりれれ子さ苦し鶴烟亦
さりよゆくはと菜そつらとり
きりや鶴の衣を明て共白う羽
根のくくつる葉もありを多妙
片角と藻よりくまらりては月

蓬戸
兔夕
為秋
千布
麻介
魚尺
兀子
投茶
一角

川蝉や藻より飛れれ玉ひる
物つらひやわ月とを記鶴の衣
若竹やそよれ出しく星平の
蝶より袖は羽風やくく雁馬
うさ草や花よりあふ小舟
豆と又鶴みつるを衣婦の
夜をうけて候し漕形り菱は
伏勢ハ葉くくを思ふ葉の姉
竹の子の竹よ候らり翠有る

野菊
是物
對賀
木然
弄蝶
吐江
鏡舟
南樓
蓬戸

新くよある朝もよきて花城く如
 追物み後てらん今年麦
 仍す心といふ約束や鼻月面
 喜望のさうらうを親しかり
 六月もや鏡を焼く比丘尼高
 とも紙子打して悔ふ雲う那
 猿人下りまほされり花うつこ
 人も来は余亦つもの次は月圓
 眠我
 百頁
 文尺
 部唇
 鬼守
 長羽
 葵古
 夏吟

藤花死やとれなき里のうし野川 降糸
 水竹舟の比阿や一に家み夕う舟の志強く
 見えそ蚊世火之す婦も阿とれなり
 阿ふをを猿人追く蚊や里分 遊心
 涼しこの月よ乃ありあれえ
 凌霄み日とらりよそく夕をこ
 やり水よ蝶れ海帆や夕すすみ 一茶
 虫干や鏡卷のる乃晴らそり 茶静
 そのとんをまそこの人や氷室さ 得寿

盗むよよ糸を付くり蓮乃花 巴水
下身は流みあつさそ満る日傘 連丈

短著子小刺をんさむ涼の柳 桃鏡

喜んくりみそくおろろの清み式 寛丈

くらそそ記又足流不清水うね 夜梧

明不の言極はけて喜回うね 花口

飯喰ふ森とそろのりけ喜回ふ 西葎

碎く流み水は真やとこあてん 木然

夕風を遊くまろやあうりら 必鏡

月を望み新はくけて曇る柳 五枝

蓮咲やあふくこめあれ毎 眉山

救やと大みそくく耀る名前うね 鬼守

返さるれ目を色き新あつさこふ 花口

昔あや麻上下の柳うひさし 山秀

くらしとや虫干時乃多れ唐 菊色

くらは毎よ月の系う一の體う那 葵蔵

うもあさや宗祇の祭れむう浩 曲枝

くまの神と遠識をうけし神門か
百姓は神と云ふと紫蘭式
夕のちやまゝ流れて暮の秋
あま月後又おゝ

白鷺子鳥帽子を世もや此後川
祇園會や花子まゝいりる可き
うゝ里大や蟹の遠より海川
ゆくあはれ神代一りゝる此後川
七夕満つるあうちまゝありゝる此後川

あまの母形をいりて厚啼て来るあはれ
星をいりて梨壺五人待せし
まづ秋やあまの月白くしり
まゝちるまゝのいりて糸の柳をいり
初秋や白くまゝいりてあまの月
世の中をいりてあまの月
橋をいりてあまの月
夕のちをいりてあまの月

魚尺
茨江
菱雲
蓼太
青面
烏曉
巴蓼
連丈
乳筆
太喬
眠江
投茶
免名
得奈
吐缸

さむしーさむしーめや石子桐一葉
 魚尺
 辛らさきの草餅やすしー桐乃杖
 魚尺
 黄くは柳下り信の意はく種
 襖付
 白粉はあちる里や妹く屋と
 共童
 舟影やすいさくら水底り馬
 馬曉
 藤や日陰のまもむさゆら次
 桃鏡
 二つまゝの朝の海は朝露く種
 陶家
 年をゆる用ん梅や風仙花
 昔乃
 鳥兜咳や雲あもこ越る来
 世存

一葉てハをうけ芭蕉の破道りり
 兀子
 傾城は手の麻く細く確く種
 富吟
 子を隠し親はうらまそく確く分
 活丈
 彼れ押あふ盆は舟秋の如
 乙児
 人よあう病をく秋を種盆の月
 盤古
 久しーくも逢人うましー盆は舟
 蓼且
 まゆらーの隈ある秋を盆の月
 金危
 説柳や何の穂しきて雲を
 昔成

魂抄や桔梗の心しは新好し
巴蓼
多浦抄子我を恋し九十九賢
共童
秋をすくく魂をありきり言能
長羽
うさくぬりのおし之やあ粒織冠
蓼古

松雪や文て砂糖子霧如声 天府
百葉子草く日く海や虫乃声 眉山
虫籠のそつふそや夕アノ肌 千布
丘ひらりゆり霧をく虫れ声 嵐色

あつあつや我唐かうくくはくは
子交
鈴むしや詠語れ秋のうく通空 芳堂
松雪や庭す記かうくく麻草在 牡丹
子をおりふ園抄ぬし厚の声 必親
初唐や又草ものを梅れを肌 青田
萩のふ葉美はく印と月さ回わり何をかそは
あつあつと秋のそくおぬる又世分乃世
あそおしり色
春系をいそ世をれ所しうか 山幸

あゝ遊と暇と川紙を世かへ
秋もすくく秋も佳くわ世分ふ
途くく露ハ心ゆく野分う舞
傾城も待秋や琴を阿るの河

園愁

秋風北窓く切らる 鏡う舞
蘊念をうくれ 歩りや秋の風
定めあふく秋の空をうくく見ふ
あはれぬのそむけくきうり秋の音

此書此れ唱秋うちをり 秋の風

傘はして秋くちくちく葉山を
名月や文もとのとハおのそく
名月や 富士も 浅るそくみ山
名月やくく露の秋をきく風
月よ又阿漕う浦の秋をきく
月影をおくくく や露く水
露の志不む側くく法をきく

鳥秋
文尺
英也
仙路

鬼秀
蝶狂
林厚
其音

麦車

婆心
吏仙
仙茶
古道
弄蝶
怪車
後白

八餅やの田に臨む波も如く
白くても夕ぐれやけし暮る夏の空
晴や吹あけられぬ梅の枝声
月よよの志こゆる萩や菊の香
蘭の香や君のあはれを捲簾
茶の香も下り魂久しき井婦人
このいとぬき持りり白菱苔
およよのそらも降下りふ菱苔

寛文
赤江
花口
涼風
活土
桃司
唯我
阿人

三秋の月を日と暮るる如く也
秋の香も撫ふ也一とく度りり
秋もろや國西をく山は秋
落葉や月よく風のそら海馬
うく枯る中くく春一松の風
梅の香も多ハ何く亭乃海
そらんても女よあはぬ茶山子
落く川あのはれや子猫晚梅
福刈く秋をけりし成みりり

月井
八巻
是物
花口
一茶
免夕
巴水
四國
耳保

目よ深ぬとあつ子一秋の山
麻の声も米も多うて秋の風
ひまの鈴も風もすや鳴る繩
ぞんぶんも柳洗りりたぐし水
うゝ枯や風は皺るるみすう
木つゞきの流き儘てやあちう
木はなや一本も秋の葉も枯
あゝ菊も垣も竹乃こころんか
さくらりれ大い流るる菊の露

菊の香やむしーの人の夜を

ゆきあふてあまをそり後の月
紋つぎを借の借もや乃ち花月
はかきこに恋せはいふきんくは
法華も秋を鳴るりきんくす
養老は淵又ふんく新酒の風
和系する者す出して返秋の那
折る呵る人新てかー夕那葉

南樓

南樓
蘭陵
萍系
曲枝
如風
蘭徑
雲
和文
親年

夜光
一聲
夜梧
何賀
祇二
奇峰
苑外

秋の解く隣の意記きぬさうか

陶家

山に菊の菊して見る秋もふか

秋風

人何くも此亭に葉山子う那

六窓

文にて山さとしちうふ 陸二那

茶静

茶大根中らま多ちぬ九月に

菓丸

いひ話くらせる皆源氏物くらり枕茶紙をた

るりりあさねとおかしくり今又ふいふと

みせ何くはおほしきといふぬを後ふらる

るをたはは葉りりまうせつあちささ那家

すさこふくふやを捨るきこり力形ま

人の刃ら一紙もにに紙梅名枯れしき

あう秋よハおさくをいふまけつ

本くくくや一葉よ吹く七拍枚風

冬うねや風の中く橋の音 隣京

紙子若く枯れぬぬぬぬぬ 五板

少ゆきは良きれ物何し返死 茶静

大名のうへり花あり大井川 千奔

それ印のさすのくくう陶記 侗賀

帰るに 呼 庚子 朽く 春 母りり
茶 北 死の とも 船 香を 結ぶ とも 春

八十男
観牛

浪 玄 楮や 舞 子 喜 文 城 山 松
波 石 舟と 志 あり きて 海 嵐 吹
舟 志 氷 と 誓 の あ や け ぬ
水 多 や 春 の 藤 さ め ち 柳 陰
誓 考 此 文 春 ち ち ち ち ち ち ち ち
舟 多 や 別 て や 枯 し ち 後 ち ち

天厨
安心
乳拳
鳥秋
八十男
死外

う の く と 夜 小 八 春 や 初 時 辰
時 辰 似 ぬ ち の 陰 て 面 秋 ぬ
物 も 風 子 片 羽 子 ち ち ち ち ち ち ち
病 舟 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
深 ち ぬ 鳥 丸 あり ち 川 城 ぬ
常 燈 此 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
夕 ち 水 や 鳥 の 舟 ち ち ち ち ち ち ち
春 も 春 ち ち 悲 感 ち ち ち ち ち ち ち

野菊
夜光
如風
西落
天
活丈
古道
令危

学文を抛く紅ろを時ぬく非

曲枝

高き橋より日

昔ひく志く河橋の夜明の肌

鳥曉

大根心く段くつり日何し哉

小鳥

拍賞丹如く門おの巨雄く非

鬼鳥

炉心くもや世を字治山よ人出入

是物

酒賞くく麻さめをやまく一各義

對賀

蓋ひけてんまて治をり角以中

和文

客んんんく幣し一括あるをうか

能求

方也忘や皆彌後の瘦くもち

涼風

逢戸忘や香れり米もを一物

風趣

一ふくろ十喜葉ふ十夜く肌

奇峰

秋をひらく糸も果を文時ぬくか

山史

汀れ葉よ紅葉のちりごとくうりく葉いと

白く

白くをけるあしきやるをぬくをうりく

く

うりく火やもてくまにける下紅葉

天府

初葉や時り明ゆく星れを

吏仙

清く人もちりし落葉のころう鐘
うつせいの曉こころや相火をけ
そのいそぬきまを志うと大鐘ふ
音をうり氷付く侍巨燈の那
星み盛ふあとのうきく紙子うぬ
うすく氷よりけ入事や留ま乃親
宗鑑よとをり音阿少大根川
物の身夜物の園うけく秋無いさ

南樓 葵丸 於房 兼上 櫻司 寛丈 田圃 連丈

とく物の音造来の程つとねさよ
葛城もとくさく水橋や秋れ音
うきくしてと来来の死やうふ乃音
皆うりや葉うりつ音水行ひさ
湖あうり凡そそ出た夜の音
嘘つくとあうり道やせんうふ乃音
以中是そ影さすし出ずや門の音
音れりや音と音との音飛とあ
袖音や比良も音とり朝りさ

雷堂 梅人 祇什 太喬 鬼秀 夜心 五柝 身得 得壽

ひしりしはむふ捨を〜菴取
 いさ越く雪きうん〜若坂
 舌声や銀仕ま似る新傷り逢
 相くぬる友逢もつり年共言
 傾城り水の隙や年共言
 と〜此尾や隙ゆく牛の影りし
 ゆく年や櫓け初る猫の意
 沙佛名若おの候〜川を〜そ阿つ道よん
 形さるるも志けく表のいそ新まらり〜

桃鏡
 巴菴
 吐缸
 水
 文尺
 芳堂
 夜梧

き〜早の縁り氷や此仏名
 意せし〜思ふ目もあり法仏名
 語系れ云ふ人やきぬ〜り
 松賣る人十〜己の昨乞うれ
 大佛の鼻〜雪〜り様〜ひ
 解つきや葉〜り一輪れ白牡丹
 春より〜り〜〜〜ありを〜
 存ひ〜氷の中〜のら〜り〜れ

魚波
 蓼太
 巴菴
 山幸
 唯
 蓮戸
 子交
 仙路

追儼らうり言方洋子様くあうおりあは
ほこの世の秋のつらき時よみ松とて
夜半のつらき人の門を記をありきと
何よりあつむふとくくくの
是をそとくくくくくくくくくくく
若たくくくくくくくくくくくくくく
即そあれ

風鈴と雪とくくく乃名録か
蘇太
解花を縮くくくくくくく
湖堂

かき人のあつたてて雲まのくくくくく
初うらちう記をあつたつたくくくく
少くくくくくくくくくくくくく

かき記の音あつたてて雲まのくくく
陽喬
山菜やくく月花乃玉まつり
蘇太

あつてあつたてて雲まのくくくくく
とくくくくくくくくくくくくくく
あつた大語のくく松とてくくくくく
うきくくくくくくくくくくくく

猿啼く雪まじくは沈む

川舟もやき 秋のあまふ

暹南をんをくちかー小袖

阿〜弓の吹奏〜

燭臺に光をくはす音の

風〜く〜とき〜乾菜と

番匠も去年の志をりの冬さ〜

〜やけれはもあまぬお色揃

在〜と〜夕〜水鳥の〜

月〜と〜裏〜と〜昔〜吹〜

雲橋よみ〜る〜の菊のあ

ま〜と〜お〜と〜雨化乃〜

横〜も〜よ〜と〜の〜

麦は〜〜らぬ飯もか〜ハ

花〜と〜も〜と〜と〜

月〜と〜の〜の〜

月

太

月

太

月

太

月

太

月

太

月

太

月

太

月

太

我玉此あきよき東風もあつりく
 尾もむししちあつりく仇あそ
 山原を居て謝ぬふかむあやも
 おら海り札を里れ西目
 来玉拜炊りもそくぬ流かく
 ちくんと替女も加持のお伴
 二階くそそくそくそ元そ意
 片の後よりぬ除秋のちりぬい

太月 太月 太月 太月 太月

取あそそきやそそくのそそり
 堤多そち柄野ハ安倍せかり
 揃つくそそきそそくそそ風呂
 履そ競るもいつりくの秋
 うつふ木子新のあらの月晴そ
 そみちあそいそそきそそそ
 そそそそと楠をり和田ひそり
 あそそそそそ赤子伝そ

太月 太月 太月 太月 太月

廿九

風を舟楫回く此睦うつり
柳より 磁れ 菱よりすまゝ
床をいれをきくめ中て玉櫛首
誰よりあふらの君よりうつく
暮てくてももさ原の戦く之
人あつたさうら 暖簾そのま
うさうさ水みぬく 春加帳
筑い糸のたよりをうりしと

月 太 月 太 月 太 月 太

昔を麦まてをいれくくと 津まて
絹糸もさうく 在れ乃百姓
世生もまきゆさの空の月
うかまてくらをうらふらん
庭をよハ糸子唐多現 毘法作
けいふて 亮の悟字すまゝ
新をまて 藤よりの鐘を祀りて
とーよ 一度の松より 龍院

月 太 月 太 月 太 月 太

洗滌もむきしをうれぬたきとて
きく塩悪く武者無りそと
お袋と死枕しりめて小盃
学文海しりし海客の志しき
けあらの面ほす尾長ちりくま
世と氣のふぬる極示
あきも秋討の翻れ泥かき
月と新との日きくきりし

太月 太月 太月 太月 太月 太月

質よきく病もさひしりあ

陣すく 猶もはくく

送り北の寺を愛いそき

神しつ乃 碁石一目

紙らんと巨魁しりふ龍田山

祈しぬ言れ無母はくく

足すし程細挽く岩つらひ

糸のあひひの醫者すく秋の家

太月 太月 太月 太月 太月 太月

ニウ

引き出すハ折折此ハ仙翁
谷や和琴のうらるやうそも
豆中と身も清く馬不うり
駒場此言雀秋と啼を令
姫若と薙をほめて涼も
いつとと小判いさく
山風子梅も橋も花いさ
菜をあさくはて蜂のむら後

月 太 月 太 月

六位まで踏分の後妻海
あきらみひらひら言説もう肌
達立此強言評定も果やう次
夕日乃世をささくはれ
いつくみ世帯志とる浮舟若
神のりもささく男あうせ
きりくを氷残りて折あしハ
血乃其流路も若子あれ烟

月 太 月 太 月

盗人下り志よりて忍むるころ計
弥陀も網亦も絶法らり之
伐あけて延森のまゝの九折
東志くくころひひくくま
管仏の月もあまぬ楯まゝ
うくかま筆子日次不つく
法と入れ諺みまると遊そり
志くくろり灯を町ゆたそま

太 日 太 月 太 月 太

志けくして忍ぶる小蘇十むり
りふ志連おれまひとそまん
あまする波志くく蟹のまゝと
志くくくくま家ね夜あじし
枕して忍ぬ世ね人を死の友
産れ朽くろり四季の辰

太 月 太 月 太 月

徒然百韻跋

夫俳諧者和歌之變也猶詩有絕句爲其
詞僅十七言亦能籠眇思于毫芒之內造
曲情ヲ辭氣之外因美見風以刺ヲ通贊ヲ諷
詠可以樂ヲ賢ヲ飲可以味皆是感物發情之
餘嚮而風雅比興亦自在其中已答貞德
吐金聲於西京蕉翁復玉振於東都我文
雪菴老人嘗受業於嵐雪翁之門人而頗

聞其幽，稍至其妙，微言之緒不絕於今。其
從徒數百人，亦皆斐然成章，屬者輯錄其
門人所詠若干篇，殺青已就。余受讀之，則
覺其言簡而旨遠，其辭文而調高，短韻往
往使人舞蹈，於是乎海內諸子靡狀承風
嚮慕，傲其調，同聲相和者不為少矣。老人
請言於余，余未嘗聞此伎，或恐失其旨矣。
雖然，厥居孔邇，旦夕交接，而得傍觀於都
鄙，四來之篇，什時竊拊下風，則謂余為知
音於此道，亦可也。因志於卷末，聊以塞命
之爾。

明和庚寅夏六月

東都 滕直題





十
五

五
十

